
ホープ～まだ見ぬ明日にも希望を～

生時(レジェンド)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホープ〜まだ見ぬ明日にも希望を〜

【Nコード】

N0398D

【作者名】

レジエント
生時

【あらすじ】

普通の少年、愛上夫^{あいうえお}は、公園で犬と出会う！しかし、この犬ただの犬ではなかった・・・

第1章 神様からのプレゼント

1997年・・・

生時という男が、クローン病と診断された。
数え切れない入院・・・

そして、10年の年月が流れた・・・

この病気は難病で、治らない病気・・・

何度も世の中がイヤになった・・・

だからこそ、希望を・・・

「おい！」

だからこそ、希望を忘れては・・・

「おい！作者！前書きがシリアスすぎるぞ！これそんな話と違うぞ！コメディだろ！？タイトルもおかしいぞ！」

・・・クローン病については、「武勇伝／＼修羅の者たち」を読んでもください。

「宣伝するな！」

・・・

え、このえらそうな餓鬼が、主人公です。

名前は、愛上夫あいうえおで、年は28歳！

「作者！もつとカッコイイ名前にしろよ！しかも、28歳は作者おまえだろぅが・・・」

・・・年は17歳、尾矢高校2年生である。

家族は、母親はスーパーでパートをしている愛して代（45）と中学2年で、ヤンナーの愛愛子（14）の3人暮らしである。

父親は5年前に、交通事故で亡くなった。

そんなある日・・・

公園に一匹の犬が、捨てられていた。

上夫は、その犬に、近づいた。

「かわいそうに・・・」

上夫には信じられなかった。

自分のペットを平気で捨てる人間が・・・

しかし、もっと信じられない事が起きた。

「おい坊主、キビダンゴをくれ」

「・・・ウ、ウソだ・・・犬がしゃべった」

実はこの犬、人間として、生まれてくるはずが、神様が間違えて、犬の形で作ってしまったのだ。

さすがに驚いたこの犬の夫婦は、この公園に捨てた。

何回も拾われ、何回も捨てられている。

「若いのに、ワシを拾ってくれる人間、お前さんで5人目だ」

「ちょよ、ちょっと待て、飼うなんて言ってないぜ！」

「人間は冷たいな・・・ワシだって、好きでこんな姿をしているわけじゃないのだぞ！」

「し、しかし・・・」

「お願いしますよ」

「しょうがない・・・飼ってやるか・・・」

「ありがとうございます！貴方は、神様です！・・・ん・・・？こら、神！何間違えてるんじゃない！どうやったら、犬と人間の姿を間違えるんじゃない！？」

「お、落ち着け、お前こそ、俺と神様を間違えているぞ！」

「・・・す、すまん、すまん」

「まあ、とにかく、ついて来いよ」

犬は、上夫の後をついていった。

「悪いな、若いの・・・」

「どうって事ねーよ。しかし犬に若者扱いされるとは・・・」

「ワシはこれでも、人間の齡でいうと、50は超えている。」

「そうか、でも、俺には、愛上夫という名前があるから・・・」

「上夫！？変な名前・・・」

「変なのはお前だ・・・頼むから、一足歩行で歩くな」

「おっと、クセだな・・・これ・・・」

さて、この先どうなるのか・・・

第1章 神様からのプレゼント（後書き）

初のコメディ・・・ない頭を使って頑張ります！

第2章 新たな家族

「ここだぜ」

「ぼ、ぼろい家だな」

「犬小屋よりはマシだ」

「いいか、おとなしくしてろよ」

上夫がドアを開け、中に入っていた。

「ただいま！」

「アニキ、なんだよその犬・・・」

上夫が話そうとした瞬間、

「上夫の妹だろ？かわいいなあ」

と、犬が先に喋ってしまった。

「な、何だこの犬・・・喋ったぞ!？」

すると、

「何ですか、玄関先で・・・」

母親の、して代が現れた。

「奥さん、美人で若いね」

普通なら、驚くのに、母して代は、

「あら、かわいいワンちゃん・・・もうすぐお昼だから、上夫の部屋で待っててね」

「母さん、驚かないの？」

「私、子供の頃から、動物とお喋りしたかったのよ」

「じゃ、飼ってもいい？」

「冗談だろう！私はイヤだよ」

「愛ちゃん、家族が増えていいじゃない」

「犬、来いよ」

「上夫、俺の名前は？」

「・・・ポチ」

「おいおい、ポテトチップの略みたいな名前はカンベン・・・大体、犬みたいな名前だし・・・」

「犬だろ」

「こんなヤツ、クズって名前が似合いだ」

「譲ちゃん・・・クズは愛子だ！」
おまえ

「前の家とかでは、なんて名前だったんだ？」

「・・・（このガキ、俺が忘れようとしている事を・・・）」

彼のかつての名前は、犬コロ、ワン公、化け犬などである。

「セイヤ・・・セイヤにしよう」

「何で、俺達よりカツコイイ名前なんだ！」

「まあまあ、最終的には、神様が決めるんだから」

「神！？貧乏神か？」

「貧乏と言えば、貧乏だな・・・あの方」

「お前、神様知っているのか？」

「この世界の神様と言えば、作者の生時さんに決まっているだろうが！」

ということで、犬の名前はセイヤに決まった。

「よし！神様がセイヤと決めてくださったぞ！」

「じゅあ、俺の名前も変えろ！」

・・・台所から母の声が聞こえた。

「ごはんですよ」

「作者め・・・俺の名前帰るきないな・・・」

「おおー、今夜は肉ジャガか！やっと人間らしい食事が出る」

「いただきます」

モグモグ

クチャクチャ

「お代わり！」

「お前、少しは遠慮しろよ」

「居候、三杯目から遠慮するな・・・と言っじゃない」

「三杯目には、そつと出し・・・だ！それに、最初から遠慮してねーじゃん」

「ごちそう様・・・奥さんの料理サイコー！美人だし、旦那さんがうらやましい」

「・・・親父は事故で・・・」

「・・・そうか・・・ワリー・・・」

父を尊敬していた上夫には、辛い現実・・・

「安心しろ！俺がお前達の父親になってやる」
バキッ！

「ふざけんな！」

上夫と愛子の鉄拳が炸裂！

「たく・・・変なヤツ拾ってきて・・・」

素晴らしいながら、愛子はタバコに火をつけた。

「こらー、未成年がタバコを吸うな！変わりに俺が吸ってやる」

「お前のほうこそ、犬のクセにタバコを吸うな！」

「うるさいやつらだ・・・ほれ、おて」

「アニキ！早く捨てて来い！」

「二人ともやめなさい！セイヤさんは、体は犬でも、心は人間なんでしょ！」

「・・・コイツは、コイツで、苦労してるんだ・・・」

「苦労したよ・・・作者の生時さんを、憎んだり恨んだりもした・・・」
下を向きながら、真顔で答えた。

「セイヤ・・・」

「でも、痴漢や覗きをしても捕まらない！いいだろう」

「二度とコイツに、同情しねー」

はたして、セイヤはこの家族と、うまくやっていけるのか？
作者の私にも分かりません！

第2章 新たな家族（後書き）

いつまで続くかわかりませんが、これからもヨロシクお願いします
^ ^

第3章 生時とセイヤ（前書き）

体調が悪くて、なかなか書けませんでした。

でも、くたばりながらも、この物語の事を考えて、病気の事を少しだけ忘れる事が出来ました。

そのために僕自身、物語に登場させていただきました。では、どうぞ^^

第3章 生時とセイヤ

次の日……

「……腹減った……」

そう呟きながら、セイヤは目を覚ました……
時計を見るとすでに昼の1時になっていた。

「もう、こんな時間か……上夫、うえ……そうかアイツは学校
に行ったんだ……ママさんはスーパ―の仕事に行ってる……今こ
こに居るのは、俺と愛子だけか……」

そう言つて、セイヤは、愛子の部屋に入つていった。

「スー・スー……」

「寝顔だけはかわいいな……よし愛子、俺が幸せにしてやるか
らな」

セイヤがニヤニヤしながら、愛子の布団に入ろうとした次の瞬間！

「何してんだ！ボケ犬！」
バキッ！

愛子の鉄拳が炸裂した！

「今度こんな事してみろ、お前をこの世から消してやる」

「ヒー、ごめんなさい（俺としたことが、ガキ相手に理性が吹っ飛
んでしまった……）」

「分かつたら消える！」

愛子はそう言つて再び夢の中へ・・・

セイヤは台所に行き、用意されていたおにぎりと、朝食用に用意してあつた菓子パンを食べた。

その後、彼は食後の散歩に出かけた。

彼が堤防を散歩していたら、一人の少年が、5人のヤンキー達にいじめられていた。

「お前ら何をしているんだ！」

「なんじゃい！コラー・・・？誰もいネーな！」

「ここだ・・・ボケ！」

「な・・・犬が喋つた！？」

「俺様は神様の使いセイヤだ」

さすがにヤンキー達もいじめられていた少年も驚いた

「じよ、上等だ！化け犬・・・ボコリにしてやんよ」

「神様、私に力を・・・」

セイヤがそう言うと、一人の男が現れた

そう・・・彼の名は、この物語の作者、生時であつた。

「ジャジャーン！生時参上！」

「な、何じゃテメエは？」

「控え！こちらにおわすお方こそ神様の生時様だぞ！」

「何が神様だコラー！」

「・・・諸君・・・私を怒らせると怖いぞ！物語の中なら、私は強い！」

「いったいこの後どうなるのか？ネタを考えずに登場した生時・・・
一番ピンチなのは生時であった。」

「アイツ一人で、何ブツブツ言ってるんだ？」

「さあ・・・」

第3章 生時とセイヤ（後書き）

次回では、武勇伝のあの男を登場させるつもりです。
もし良かったら、読んでください^^
体調が良くなったら、また書きます。

第4章 最強の武道家（前書き）

体調が悪くて、バイト休んでばかりいたため、ついにクビになってしまいました。

誰もが安心して暮らせる新時代はいつ来るのか・・・

まあ、イヤな事があつたら、現実逃避します^^

第4章 最強の武道家

ヤンキー達に囲まれて、大ピンチの生時とセイヤ・・・

「クソ！仕事は首になるし、腹が痛いし・・・」

「生時さん、現実とゴチャ混ぜになっていますよ」

「あつ、スマン、スマン・・・安心しろセイヤ・・・俺はこの世界では最強の武道家だ！俺はこの世界なら強いぜ！かかってきな〜ガキ共！」

「ああ〜！？俺らに喧嘩売ってるのか？上等だコラ〜！」

「・・・（やばい・・・怒らせてしまった・・・最強の武道家どころか、俺は最弱な病人じゃないか・・・だが俺は作者だ・・・この世界は俺の心に回っている・・・）」

「生時さん・・・信じてますよ」

「安心しなセイヤ・・・もうすぐ強い味方が来る」

「マジですか！？」

「ああ・・・それまでお前が食い止める」

「む、無理ですよ〜」

ヤンキー達が襲いかかろうとした時に！

「あれ〜、生時さんじゃないですか」

そこには、女の子のような感じの青年がいた。

彼の名は神威龍一、天神流十八代目・・・「武勇伝」の主人公である。

「いや〜、久々だね・・・龍一君」

「また変なのが增えたぞ」

「生時さん大丈夫なんですか？あんな男女で・・・」

「クス・・・彼こそ俺が作り上げた最強の武道家、神威龍一だ〜！」
その名を聞いて、ヤンキー達は怯え始めた・・・

「マジかよ．．本物か！？」
モノホン

「間違いないぜ．．俺は昔、アイツの喧嘩を見た事がある．．ヤ．．ヤツは、本物の喧嘩屋修羅！」

「頼んだぞ！龍一君」

「えっ？何ですか？スイマセン．．僕トイレに行きたくて．．」

「．．ト、トイレですか．．いつといれ．．」

あまりの出来事に、親父ギャグをいう生時であった。

「じゃ、失礼します」

そう言つて、龍一は去っていた．．

「生時さん．．行ってしまったぞ．．」

「．．ア、アイツは、元々この物語のキャラじゃないから．．ハハッ」

「おい！お前ら覚悟出来たか？」

「生時さん！何とかしてください！」

「もうダメだ！」

バキッ！

一人のヤンキーが殴り飛ばされた．．

「戻ってきてくれたのか！？龍一君．．じゃない」

「あ、愛子だ！」

「クスッ．．何やっているんだよ！？化け犬」

セイヤと生時のピンチを救った愛子．．

この後一体どうなるのか．．

第4章 最強の武道家（後書き）

次回は・・・まだ何も考えてません。調子が良くなったらまた書きます^^

第5章 イジメに負けるな

愛子が現れると、ヤンキー達は、神威龍一の時のように怯えた。

「お、おい・・・修羅の後は愛愛子かよ・・・」

「私は弱いものイジメが嫌いなんだよ」

「ま、待ってくれ・・・ほんの冗談・・・こいつ等と遊んでいただけだよ」

「なら私が暴れる前に、消えな！」

「・・・い、行こうぜ・・・」

ヤンキー達は愛子に恐れて逃げてった・・・

「お前ら大丈夫か？」

「俺達は大丈夫だ」

「ぼ、僕も大丈夫です・・・」

「お前、確か私と同じクラスの・・・名前は知らないけど・・・」

「大岩力也です」

「そうそう、大岩君だ」

「愛子、コイツ完全に名前負けしているな・・・」

「お前、昔からいじめられていたな」

「僕は愛子さんみたいに強くないから・・・」

「愛子、お前、喧嘩強いんだ」

「最近、アニキから武道を学んでいるんだよ」

「何！？では上夫も強いのか？」

「アニキは、いろんな格闘技を学んだんだよ」

「それはすごい」

「生時さん・・・今回初のセリフですね」

「生時！？コイツか！？この物語の作者は？」

「どうも、生時と申します。最近、仕事クビになったクローン病患者です」

「大変だな・・・頑張れよ」

「・・・は、はい（自分の考えたキャラに励まされるとは・・・）」

「大岩、アンタも武道を学んだら」

「・・・僕には素質がないだろうし・・・だから弱虫君のままでいいんだ」

「やりもしないであきらめるのか？情けない男だ」

「愛子の言うとおり、強くなってあいつらを見返せよ。ですよ・・・生時さん」

「・・・石山君だったかな・・・」

「大岩です」

「生時さんアンタ作者だろ」

化け犬のセイヤにつっこまれた。

「（こんなヤツが作者で大丈夫なのか？）」

愛子は心の中で不安になっていた。

「君の事を心配する前に、俺自身この先どうしよう・・・」

「・・・大岩、お前はこんな大人になりたいか？」

「もう、僕の事なんかほっといてくれ」

大岩はそう言って走り去っていった・・・

「大岩の馬鹿・・・」

「愛子・・・大丈夫さ、化け犬の俺でも楽しく生きているんだ」

「セイヤ・・・お前、意外といいヤツだな」

「やっと分かったか」

作者の生時が出ている時は、セイヤはまともなヤツだと愛子は思った。

第5章 イジメに負けるな（後書き）

早く調子を良くして、仕事見つけなくては・・・

第6章 桃太郎

次の日の朝・・・

「愛子、少しは元気になったか？」

「スースー・・・」

「何だ。寝ているのか・・・」

そっぴいなから、セイヤはまた愛子の布団の中に入ろうとした。
バキッ！

愛子の鉄拳が炸裂した。

「この化け犬！今度こそ殺してやる！」

「わあ・・・待った・・・俺はお前の事が心配で・・・」

「うるせー」

その時、上夫が入ってきた。

今日は土曜日だから、学校は休みである。

「何やってるんだ？」

「アニキ、この馬鹿犬が・・・」

「いや・・・俺は愛子のことか心配だったから・・・」

「だからって、布団の中に入ってくるな」

「分かった、分かった・・・セイヤが悪いんだな」

「えっ？俺が悪いの？」

「ほんとに殺すぞ！」

「・・・す、すいません・・・僕が悪かったです」

「今日は土曜なんだから、静にしてくれよ」

「はい、はい・・・」

そう言つて、セイヤは散歩に出かけた。

1時間後・・・

セイヤは、一冊の本を拾つて帰ってきた。

「上夫！上夫！」

「何だ？」

「本を拾ってきたから、読んでくれ」

「ん？・・・桃太郎・・・」

セイヤが拾ってきたのは、桃太郎の絵本だった。

「こんなの拾ってくるなよ・・・もとの所に捨てて来い」

「上夫！お前には捨てられたものの気持ちに分からんのか？」

「ただの本じゃないかよ」

「ただの本じゃないもん・・・かわいそうな本だもん」

「お前は子供か？」

「・・・分かったぞ！上夫、お前読めないんだろっ」

「お前と一緒にするな」

「じゃあ読んでよ」

「めんどくさい」

「読んで、読んで・・・」

「うるさい奴だ。読めばいいんだろっ」

上夫は、仕方なく読むことにした。

「昔々、あるところに・・・」

「上夫、あるところって、何処だ？日本か？フランスか？」

「日本のおとぎ話なんだから、日本だろっ」

「そうか・・・その絵を見ていたら、フランスかと思った」

再び上夫が読み始めようとしたら、

「上夫、昔々って、昭和の初期か？」

と、セイヤが聞いてきた。

「もつと昔だよ」

「そうか」

「昔々、あるところに、おじいさんと、おばあさんが住んでいました。おじいさんは山へ芝刈りに・・・」

「何！？山でしばかれた！？」

「・・・おばあさんは川に洗濯に行きました」

「川で洗濯とは・・・大正時代の人は大変だなあ」

「あのな、昭和や大正よりも、もつと昔だから・・・」

「じゃあ何時だよ？縄文時代か？」

「・・・そうそう」

上夫は適当にごまかした。

「続き読むぞ・・・おばあさんが川で洗濯していると、大きな桃が流れてきました」

「縄文時代には、そんな大きな桃があったのか・・・」

「おばあさんは桃を拾って・・・」

「あんまり拾いモンはしないほうがいいぞ」

「・・・そうだな・・・お前なんか拾ってこなければ、お前の拾ってきた本を読まずに済んだもんなあ」

「・・・あつ、続き読んでください」

「おじいさんとおばあさんが、桃を切ろうとしたら、中から男の子が生まれました」

「ハハ、桃から生まれるなんて、変わった奴」

「お前がなあ」

「・・・」

「おじいさんとおばあさんは、桃太郎と名づけました。やがて、大きくなった桃太郎は、鬼が島に、悪い鬼を退治しに行く事にしました。おばあさんから、キビ団子をもらい、桃太郎は出かけました。途中で、一匹の猿が現れました。桃太郎さん、お腰に付けたキビ団子、一つ私に下さいと言いました。」

「おいおい、猿が喋るのかよ」

「お前は喋るな。静に聞け」

「スイマセン」

「桃太郎は、猿に、鬼退治についてくるなら、あげましようと言いました。」

「桃太郎ってケチな奴だな」

「セイヤ・・・」

「すまん。静に聞きます」

「イヤ、俺もここだけは納得いかない。お前の言うとおり、ケチな奴だよなあ」

「そ、そうだろう・・・」

「途中で犬とキジも仲間になり、桃太郎たちは、鬼を退治して、村に帰りました。めでたし、めでたし」

「上夫、桃太郎って、ケチで一人じゃ何も出来ない奴何だな」

「そ、そうか」

その日の昼のデザートは桃だった。

セイヤが桃を食べていると、中から虫が出てきました。
めでたし、めでたし・・・

おまけ・・・知人、友人、読者様のメッセージからの質問コーナー

Q 生時の後の（レジェンド）て何ですか？

生時・・・レジェンドは20代前半に、遊びで作ったバンドです。
脱退やメンバーチェンジが多いため、バンドらしい活動はしていません。

後、前に生時で載せていましたが、パスワード忘れて管理者に連絡したが、返事が来ないため新しくペンネームを生時（レジェンド）にしたんです。

Q エンシユアリキッドって知っていますか？

生時・・・はい、栄養剤ですね。

Q 格闘技がお好きらしいですが、そのきっかけは？

生時・・・親父がブルース・リーが好きなのと、父と兄が少林寺拳法を習っていたからです。弟も空手を習っていました。

Q 本当はアニメのキャラが初恋何ですか？

生時・・・たまたま仕事の休憩中に、初恋の話をしていて、皆学生時代には好きな人がいたのに、自分はいないと思い、半分は受け狙いもありましたが、中学時代彼女に夢中なのは確かです。

現実の人では、18の時入院したときお世話になった看護師さんです。

Q いじめをテーマにしていますが、生時さん自身はどんな子でしたか？

生時・・・小学生は普通でした。中一の時はいじめられた事があります。逆に高一の時はいじめをしてしまいました。ヤンキーではありません。ハンパ者でした（笑）

Q 病氣して辛い事は何ですか？（変な質問してすみません）

生時・・・絶食、痛み、恐怖です。

Q 私もベーチェット病で大変です。特に職場が理解してもらえなくて、生時さんはどんな仕事をしていますか？良かったら教えてください。

生時・・・パン工場に就職してすぐにクローンになり、後はバイトを転々としています。僕もなかなか理解してもらえない職場が見つかりません。

Q あなたはレジェンド先生ですか？（あるサイトのコメントより）

生時・・・そのサイトのコメを見たとき、僕のことを知っている人もいるんだと感動しました^^

Q 忍者って今もいるんですか？

生時・・・僕の心の師である初見先生は現在を生きる忍術家（僕自

身は、現在の忍者は忍術家といっています)

Q、私はG a c k tが好きです。ガクトってカムイと名乗っていたのですか？(マリス時代をあまり知らないのです)

生時・・・マリス時代(その前は私も分かりませんが・・・)から現在でも神威楽斗と名乗っています。

また質問などがありましたら、送ってください^^
生時

第7章 強敵（前書き）

急に格闘モノになってしまった・・・
ちなみに神威龍一は僕の書いた「武勇伝」の主人公です。

第7章 強敵

次の日・・・

セイヤと上夫が散歩をしていると、堤防で大岩力也が、またいじめられていた。

6人に囲まれ、殴られたり、蹴られたりのリンチを受けて血だらけだ。

「上夫、あいつがこの前言った奴だ」

「ああ、愛子の同級生か・・・」

上夫とセイヤは止めに入った。

「コイツ、このまえの化け犬・・・」

いじめていた奴らは、セイヤというより、愛子のことを思い出し、震えだした。

だが、一人だけ笑っている奴がいた。

「お前、愛子が怖くないのか？」

「ハハッ、ホントに犬が喋っている」

「（そういえば、他の5人はこの前いたが、コイツは初めてだな）」
「修羅だろっが、愛愛子だろっが、化け犬だろっが、俺に怖いものなんてない」

「おい！妹には手を出すな！」

「誰だ！？お前？」

「愛子の兄、愛上夫だ」

「へー、アンタがあの上夫先輩かい・・・噂じゃすごく強いらしいなあ」

「お前こそ誰だ？」

「アンタの妹さんと同じクラスの八木剛と申します」

「という事は・・・こいつ等皆、俺の後輩かよ」

「そうですね．．ヨロシク、せ．ん．ぱ．い」

「ヨロシクだと！？ふざけた奴だ！俺も妹もイジメが大嫌いなんだよ」

「噂じゃっ、先輩は格闘技をやっているみたいですね」

上夫は、少林寺拳法、空手、柔道、合気道、テコンドー、ボクシング、レスリング等の格闘技を学び、それを愛子に教えたのだ。

「俺も真似事ですが、格闘技やってましたよ」

そういうと、上夫に右の上段蹴りをするが、上夫は紙一重で避けた。

「さすが！」

「ふざけた奴だ！」

今度は金的に前蹴りだ。

上夫は後ろに跳び再び避けた。

力也やセイヤ、そして5人のヤンキー達は無言で二人の戦いを見ていた。

「真似事だ！？ふざけやがって．．誰に武道を教わった？」

「ククッ、誰にも教えてもらっていませんよ．．テレビとか観えて、マネしているだけです」

「クソ！天才というやつか．．」

「その気になれば、修羅．．いや神威龍一の天神流忍術も、出来る自身がありますよ」

そういうと、剛は高く跳び、そして一回転した時に、片方の足でかかと落とし、もう片方の足で、上夫を蹴り飛ばした。

これは、天神流の技の一つ、天誅だ。

「上夫！」

「く、来るな！」

上夫は立ち上がったが、額から血が流れた．．．

「さすが先輩！」

強敵、八木剛に、上夫は勝てるのか．．．

おまけ・・・第2回、友人、知人、読者様からの質問コーナー
早速、K様（イニシャルしか載せてません）から質問が来ました。

Q ドラゴンボールでトランクスと18号が好きだそうですが、他に好きなキャラはいますか？

生時・・・超サイヤ人の孫悟空、バーダック、ランチ（変身後）、若き日のブルマ、未来の孫悟飯、セル（完全態）などたくさんいます。

Q ドラえもんではしい道具は何ですか？

生時・・・タイムマシンです。過去に行き、昔の日本を見てみたいし、未来に行き、クローン病の治せる時代に行きたいです。

Q 尊敬する人はいますか？

ブルース・リー、ジャッキー・チェン。他にも初見良昭先生、宮本武蔵、沖田総司、堀辺正史先生、大山倍達先生、そして僕の師匠です。あと家族。

Q 好きな武道をやめたのは何故ですか？

少林寺拳法は当時泳げなかったため、スイミングに通わされたから、空手は病気で限界だと思ったため引退しました。

Q 学生時代、小、中、高、大と戻るならどの時代ですか？

中2～中3です。戻りたくないのは高校。あと大学は行ってません。

Q 彼女はいますか？

いません！

Q 修羅の刻がお好きだそうです、どの章が好きですか？僕は虎

と狛です。

雷の章と出海の章です。

以上 ご協力ありがとうございました。

また質問などをメッセージに送ってください^^
生時

第7章 強敵（後書き）

最近仕事が見つかったが、調子が悪い僕・

第8章 戦いに生きる者たち（前書き）

今回は「武勇伝」を思い出しながら書いたため、話が長いかも・・・

第8章 戦いに生きる者たち

上夫と八木の喧嘩はさらに激しくなっていた。

その時、愛子が通りかかった。

「あ、兄貴・・それに八木じゃないか」

「愛子、あいつらを止める」

「無理だ、セイヤ・・本気になった兄貴を止める事は私にも無理・・」

この場にいるもの達で、二人の喧嘩を止められるものはいなかった。

「こんなに楽しい喧嘩、初めてですよ・・先輩」

「八木、この強さで、弱き者を守ろうとは思わないのか？イジメをして楽しいか？」

「クスツ、別に守りたいとは思わないですねえ。ただ、イジメは先輩のような人と喧嘩が出来ると思って、やっていただけです。先輩や妹さん、そして神威龍一はイジメが嫌い・・イジメをしていれば、先輩達と喧嘩が出来る・・そう思ったからです。」

「俺と喧嘩がしたいならいつでも買ってやるよ！」

そう言くと、上夫の鉄拳が八木に直撃した。

だが、八木はそのまま上夫の腕に関節技を決めた。

さらにそのまま投げ、上夫を地面に叩きつけた後、上夫の喉に肘鉄を喰らわせようとした。

上夫は何とかかわした。

この技も雷鳴という天神流の技だ。

「八木・・お前は、ホント天才だよ」

「それはどうも」

「だがな、努力をしたこのないお前では、俺には勝てん！」

「（アニキ、八木に勝自信があるのか？）」

だが、本当は上夫に勝自信はなかった。

さっきの、本気の正券突きを喰らっていても、八木には効いていないからだ。

しかも、上夫は立っているのが精一杯。

八木の攻撃が続く・・・

「アニキ、やめろよ・・・死んじゃうぞ」

だが、愛子の言葉は上夫には聞こえていない。

「先輩、負けを認めたらどうですか？」

「俺は武道家として、負けない！」

「・・・そうですか」

八木の右の上段蹴り・・・

だが八木は、紙一重のところで止めた。

「・・・どうした？八木・・・」

「先輩は本物の戦士だ。戦いの中で生き、死ぬ覚悟がある。だから、また先輩と喧嘩したい・・・それに、先輩以上の戦士が二人、後ろにいます」

「な、何！？」

上夫が後ろ振り向くと、後ろに、神威龍一と、龍一の師匠でもあり、妻でもある神威瑠奈がいた。

神威瑠奈・・・旧姓は月形で、天神流の十七代目で、裏ではアルテミスと呼ばれるプロのスイーパーである。

「ほ、本物の神威龍一だ・・・」

5人のヤンキー達は怯え、そのまま逃げ出した。

「（アイツは確か、生時さんが言っていた最強の武道家・・・）」

「君達の喧嘩見せてもらったよ。二人とも強いなあ」

「えっ？あ・・・いや・・・ありがとうございます」

上夫にとって、神威龍一は憧れの武道家であった。

「今日はラッキーだ。先輩や修羅・・・いや、神威龍一さんとその奥さんに会えるとは・・・」

「君すごいよ。誰にも教わずに、天神流の技が使えるなんて・・・」

「真似事ですょ」

「だからすごいんだよ。今度は僕と戦うかい？」

「自分の実力は分かっていますから、やめておきます」

そう言つて、八木は去ろうとした。

「八木、弱い者を守れとは言わない。だが、イジメはやめてくれ」

八木は振り返り、

「いいですよ。俺はただ、先輩のような強い人と喧嘩がしたいだけなんで・・・」

と、微笑を浮かべ去っていった。

「大丈夫だよ。奴はホントのクズじゃない」

「はい」

「アニキ！」

「上夫！」

愛子とセイヤが駆けつけた。

「アニキ、大丈夫か？」

「ああ・・・俺よりあの子のほう心配だ」

リンチで血だらけの力也・・・

彼の目からは、痛みと悔しさで、涙が止まらない・・・

そんな彼に瑠奈が近寄り、そっと抱きしめた。

「あなたの痛みと悔しさは、よく分かるわ」

「（あ、温かい・・・）」

「あれが、ルナさんの優しさ・・・僕も昔、いじめられ、泥だらけだったのに、優しく抱きしめてくれた・・・」

龍一は、結婚してから瑠奈に敬語で話す。

それは、龍一にとって、瑠奈は妻でもあると同時に、いつまでも越えられない師匠だからだ。

「力也」

「愛子さん・・・皆さんありがとうございました」

「まあ、また、あいつ等いじめられたら、私かアニキに言えばやつつけてやるよ」

「・・・皆さんが羨ましいです。僕にも強さがあれば・・・」

「力也、俺達はそれなりの努力をして強くなった。確かに中には、八木のように、テレビを見ただけで、技を自分のもの出来る天才もいる。だが、多くのものはそれなりの努力をしているんだ。」

「八木という子も、努力をしているよ」

「えっ!？」

「僕が早朝、ジョギングをしていると、よく彼が独自で稽古をしているのを見かけた。」

「そうだったのか・・・」

「でも、天神流を誰にも教わずに、使えるのは、彼の素質と努力だろう」

「でも、僕はいじめられっ子だし・・・」

「力也君、俺も昔いじめられていたんだ。名前が変という理由で・・・だから、強くなるうと、格闘技を学んだんだよ」

「ホントですか？」

「ああ・・・」

「僕もいじめられていた・・・父親が強いのに僕は弱いという理由で・・・いや理由なんてあいつらには関係ないか・・・でもそのおかげでルナさんに会えたけど・・・」

「ぼ、僕、強くなりたい!」

「よし、愛子!お前が彼を鍛えろ!」

「私が・・・!アニキが教えればいいじゃん」

「男より女のほうが彼も喜ぶ」

「めんどくさいだけだろう」

「さっきのあの子の目、昔のリユウみたいね」

「そうですね・・彼も強くなりますよ。今後の成長が楽しみです」

こうして、力也も強さを求め始めた。

第8章 戦いに生きる者たち（後書き）

どうでもいい事ですが、レジェンドはバンド名で生時^{ショウジ}がペンネームです。

前に生時でこのサイトに載せていたんですが、パスワード忘れて管理者に連絡したけど来ないため、新たに生時（レジェンド）で載せる事になったのです。

第9章 愛子と力也のラブストーリー（前書き）

完全にコメディじゃなくなってきた。

第9章 愛子と力也のラブストーリー

二週間後・・・

力也は、強くなるため、愛子の厳しい特訓を受けていた。

「ハアハア・・・」

「今日はここまでね」

「は、はい、ありがとうございます・・・うつ・・・」

「だ、大丈夫です・・・」

力也が歩こうとすると痛みが強くなった。

「足をひねったか」

「（愛子さんって、不良だけど、優しいし、かわいいなあ・・・）」
力也は愛子に恋心を抱いていた。

「大丈夫か？」

「はい、これくらいの痛みに耐えられなくては、強くなれません」

「よし、よく言った。ご褒美に、昼飯を奢ってあげる」

「そ、そんな・・・だ、大丈夫ですよ」

「何！？私と食事するのが嫌なの？」

「とんでもないです。嬉しいですよ」

「よし、じゃあ、行こう」

喫茶LUNA・・・

「アニキに聞いたんだけど、ここの店、あの神威夫婦が経営しているんだって」

「そうなんですか」

二人は店の中に入っていった。

「いらつしゃいませ・・・ん・・・君達か、よく来てくれた」

「こんにちは龍一さん」

「いらつしゃい」

「あつ、瑠奈さんもこんにちは」

「今日は稽古じゃなくて、デートかい？」

「ち、違います。力也が、頑張っているから、ご褒美に昼飯を奢ってあげようと思って」

「そうですか。ではご注文をどうぞ」

「私はハムサンドとアイスコーヒーを、力也は？」

「僕も同じのでいいです」

「かしこまりました」

「遠慮せずに、他にも頼んでいいわよ」

「僕、少食なんで・・・」

しばらくして・・・

龍一が注文されたハムサンドと、アイスコーヒーを持ってきた。

「ごゆっくりどうぞ」

「愛子さん、いただきます」

「遠慮なく食べてよ」

二人は注文したものを食べ始めた。

「足は大丈夫か？」

「痛いですけど、大丈夫です。」

「ルナさん、あの二人も、師弟関係から恋人同士になったりして、
「そうね。お似合いのカップルかもね」

「あ、愛子さんは彼氏いますか？」

「いないよ。あんたは・・・いる分けがないか」

「はい、でも好きな人はいます」

「マジ！？どんな子？」

「・・・優しくて綺麗な方です」

本当は愛子と言いたかったが、彼にはそこまでの勇気がなかった。

「ふーん、分かった。ユウリだ！」

「えっ！？ち、違います」

「じゃー、となりのクラスの美奈子？」

「ち、違います」

「えー、違うの？うちの学校で、二人ともかわいいし、人気があるのに」

「あ、愛子さんの好きなタイプは？」

「そうだなー、アニキのように強い人かな」

「そ、そうですか」

しばらくして、二人は店を出た。

「ねー、アンタの好きな人って、うちの学校の生徒じゃないの？」

「同じクラスです。今言えるのは、僕のある先生・・・かな」

今の言葉で愛子は自分だと分かった。

「・・・そうか担任の清美ちゃんかー、いいんじゃない清美ちゃんは若いし、優しい先ちゃんだしね・・・じゃあ、私帰るから、足お大事に・・・」

そう言っただけで去ろうとした。

が、振り返って、

「忘れもん」

そう言っただけで、力也に優しくキスをした。

「あ、愛子さん！？」

「私に惚れると大変だよ」

「だ、大丈夫です」

「ありがとう。じゃあな」

こうして、二人は師弟関係から恋人同士になった。

第9章 愛子と力也のラブストーリー（後書き）

僕はジャンルにこだわらない。

あゝ、こんな恋をしたいな

そう思って書きました。

第10章 魔法の国から来た女（前書き）

仕事忙しいよゝゝ<

まだ入ったばかりだけど・・・

第10章 魔法の国から来た女

二人が付き合ってから1週間後・・・

上夫とセイヤが散歩をしていたら、セイヤ上に女性が落ちてきた。

「いたゞ・・・着地失敗・・・」

「重い・・・早くどけ」

「あつ、ごめんなさい」

普通は犬が喋れば驚くのに、女はまったく驚きもしなかった。

「大丈夫か？」

長い髪に優しそうな目、見た感じ十五くらいの女だ。

「どうもスイマセンでした」

「（この子、犬が喋ったのに驚きもしない・・・気づいてないのか！？）」

「（けっこうカッコイイ人・・・この人に決めた）」

「君、屋根から落ちたのかい？」

「あつ、私、魔法の国から来ましたミサです。年は二十歳、ヨロシクね！」

「上夫、この子大丈夫か？」

「さゝ、頭でも打ったのかも」

「あゝ、信じていないでしょう。ホントなんだから」

「し、しかし、魔法の国って・・・しかもハタチには見えない」

誰だって、魔法の国から来たなんて言われても信じられないだろう。しかも自分から言えばなおさらだ。

「証拠を見せてあげるわ」

「上夫、この子マジでやばいぞ」

「何がいいかしら・・・あつ、あなた口から血が出ているわね」

上夫は数分前、たかりをしていた奴らと喧嘩をしてきた。
もちろん、上夫は一発殴られただけで、簡単に勝利した。

「マジカル、マジカネ、マジカヨ・・・」

ミサは呪文らしきものを唱えると手が光、上夫の口に近づけると、
血がとまった。

「・・・ほ、本当に魔法の国から・・・？」

「はい！」

「うゝむ・・・少しく臭いけど、まあ、信じよう。しかし、ハタ
チには・・・」

「どうせ童顔ですよ。」

「それで、何しにこの国へ？」

「実は、結婚相手を探しています」

「結婚相手！？魔法の国では男がないの？」

「いるけど、キモイのしかない。それに子どもの頃からこの世界
に来たかったしね」

「そうかい・・・いい人見つかるといいね」

「もう見つけた」

ミサは上夫のほうを見て微笑んだ。

「お、俺・・・？」

「そう、一目惚れしました。ミサリンって呼んでね」

「俺は、無理！俺は、年上がタイプ・・・あつ・・・」

「あなた、いくつ？そういえば名前も聞いてないわ」

「も、もういいだろう・・・セイヤ行くぞ」

上夫達が行こうとしたら、ミサはセイヤの尻尾をつかんだ。

「ワンちゃん、私、本気なの・・・だから、この人のこと教えて」

「・・・こいつの名前は、愛上夫、16歳だ」

「余計な事を言うな！」

「いいじゃないか」

「愛上夫・・素敵なお名前・・」

「アホらしい・・行くぞ!」

「ウッチー待って!」

「だ、誰がウッチーだ!」

「恥ずかしがらなくてもいいじゃない。私のほうが年上だから、あなた好みの女よ」

「年が上でも見た目は子どもじゃないか」

「分かったわよ。そのかわりコンビニまで付き合って」

「まあコンビニまでなら」

上夫たちは近くのコンビニで買い物をした。

「ミ、ミサちゃん、お酒買ってたけど、飲めるの?」

「あんまり好きじゃないけど・・」

そついいながら、ミサは全部飲んだ。

すると、今まで子どものようなミサが美しい大人の女性に変わった。

「ミ、ミサちゃん・・?」

「そつよ」

「驚いたな、まるで別人だぜ!なあ上夫」

「あ、ああ・・魔法で変身したのかい?」

「違うわ。私はお酒を飲むと大人の姿になり、牛乳を飲むとさっきの姿になるの」

ミサは容姿だけでなく、言葉使いも大人の口調になった。

「少しは、上夫さん好みの女性になれたかしら」

「は、はい・・」

上夫は動揺した。

「あなたの家に行きたいな」

「えっ！いいですよ。」

「（俺だけ面白くないな・・・）」

セイヤはミサをさっきの姿に戻そうと考えた。

「ミサさん、上夫の親父はさっきのアイドル系が好きなんだよ。コ

イツの親に気に入られたかったら、牛乳を飲みなさい」

「そうなの？」

「俺の親父はもういないぞ。セイヤ、うそをつくな」

「・・・どんな姿でも上夫さんや、ご家族の方に気に入られなくては」

ミサが牛乳を飲むと、さっきの子ども姿に戻った。

「ミ、ミサさん・・・いやミサちゃん、お酒飲まない？」

「ミサ、お酒は今いらない」

「そうですか・・・」

上夫たちは自宅に帰ってきた。

「ただいま」

「おかえり・・・あら上夫のお友達？」

「お母様ですか？私、ミサといいます。ウッチーの彼女です」

「まあ、上夫に彼女がいたなんて・・・元気でかわいらしい子で良かったわね」

「・・・ああ・・・」

「お邪魔します」

居間では愛子がテレビを見ていた。

「おっ、アニキの彼女かよ」

「ああ、ミサちゃんだ」

「ミサです！ヨロシクね！」

「変わった奴だな」

しばらくすると、して代が紅茶とショートケーキを持ってきた。

「ミサちゃんの家はどこ？」

して代がミサに質問してきた。

「私、魔法の国から来ました」

「まあ、魔法の国から、素敵ね」

相変わらず動揺しない母親だ。

だが、愛子に変な奴と思っている。

して代とミサは、すっかり意気投合していた。

「アホらしい・・・アニキ、何であんな女と付き合ったんだ」

「酒を飲むと俺好みの女になるから」

「酔うと性格が変わるのか？」

「まあ、見てな」

上夫は冷蔵庫からビールを持ってきた。

「ウッチーありがとう」

そう言ってコップに注がれたビールを飲み始めた。

彼女がビールを全部飲むまでに姿は変わり、愛子は驚いた。

して代だけは能天気な、

「あら、ビールを飲むと大人らしく見えるわ」

と、言った。

「アニキ、ほんとにアイツ魔法使いなのか？」

「ああ・・・」

「なあ、私のお気に入りのカップ、さっき割っちゃってさ、直せる？」

「これくらいなら・・・」

彼女は呪文を唱えカップを直した。

「すげー、ありがとう」

「ミサさん今日は泊まっていきなさいよ」

「いいのですか？」

「私もアンタが気にいたよ」

「（これは面白くなつた）」

そう思いながら、セイヤは牛乳を持ってきた。

「ありがとうセイヤさん」

牛乳を飲むとまた子どもの姿に戻った。

「ではお母様、ミッチー、愛ちゃん、ワンちゃん、よろぴくね！きやはっ！」

子ども姿になると何かムカつくと、愛子と上夫は思った。

第10章 魔法の国から来た女（後書き）

職場には病気の事を隠してます。

正体がばれないように一般人のふりをして仕事してます。

パーマンが正体を隠して生活しているような感じです^^

第11章 ミサ学校に行く

次の日の朝・・・

「ウツチー、お・は・よ・う」

「ふぁー、おはよう・・・ミサちゃんは朝から元気だね」

上夫の心の中では、大人姿のミサに起こしてもらいたかったようだ。

上夫は学校に行く準備を始めた。

「ウツチー、どこ行くの？」

「学校だよ」

「ミサも行きたい」

「ダメだ。家にはセイヤと愛子いるから」

そう言つて上夫は学校いった。

上夫の学校は自宅から徒歩30分くらいだ。

上夫が学校に着き、教室に入ると、上夫は驚いた！

なぜなら、ミサが教室にいたからだ。

ミサはすでにクラスメートと仲良くおしゃべりをしていた。

「何故、ミサがいるんだ！？」

「上夫、お前の彼女かわいいな」

「ホント、うらやましいよ」

「ち、違う・・・コイツは従妹なんだよ」

「私、ウツチーの彼女だよ」

「うるさい！何で学校に来た！」

「面白そうだから」

「・・・よく、ここが分かったな」

「ウッチーに気づかれないうちに、ほうきに乘って、空から後をつけた」

「とにかく、担任の教師が来る前に帰れ！」

そのとき、

ガラッ

と、戸を開ける音がし、担任の女教師が入ってきた。

名前は、柿井恵子（28）担当教科は英語である。

「ホームルームを始めます。席に着いて・・・ん？その私服の子は？」

「す、すいません。僕の従妹で・・・勝手についてきちゃいまして・・・すぐ帰らせます」

「上夫、ホントは彼女だろ！」

「いいじゃんか・・・今日一日くらい」

「そうだ！そうだ！」

授業は始まっているのに、クラスメート達は騒ぎ始めた。

「静に！愛君、今日一日くらい先生が許可します。ちょうど、となりの席の山田君が欠席ですし」

「し、しかし先生・・・」

「ウッチー、いいじゃない先生が許可してくれたんだから・・・ありがとうございまゝす」

「・・・分かった・・・だけどおとなしくしているよ」

「うん」

二時間目・・・

二時間目は日本史だ。

この教科の教師、木下猿吉（34）は、暴力教師で、すぐに暴力を振るうため、生徒達から嫌われている教師だ。

「愛上夫！」

「はい！」

「柿井先生から許可をもらったからって、いい気になるなよ！」

「す、すいません・・・」

「（ウツチ・・・私のせいで、怒られている・・・ゴメンね！ウツチー）」

授業が始まって、しばらくすると、一人の男子生徒が居眠りをしていた。

だが、この生徒、家が貧しいため、休日や夜にアルバイトをして、学費を自分で払っている真面目な生徒なのだ。

だが、この教師には関係ない。

机を蹴飛ばし、起きた瞬間に、顔面にパンチが炸裂！

上夫はそれを見て、我慢できなかった。

席を立ち、

「ふざけんな！このエテ吉が！」

と暴言を言い始めた。

「何だ！その態度は！こつちに来い！」

上夫は拳を強く握り絞め、教師に殴りかかった。

「（ウツチー、そんなことしたら退学に・・・）」

上夫の拳は、教師の顔面の近くまで来ていた。

だが、教師の顔面に当たる寸前に、教師は消えた。

そして、

ゲロゲロッ

と鳴き声がした。

上夫が下を見ると、カエルの姿になった木下がいた。

ミサが魔法で、木下をカエルにしたのだ。

上夫はすぐにミサの仕業と分かったが、他の生徒たちには何が起きたのか分からず、騒ぎ始めた。

3分後・・・

木下は元の姿に戻った。

木下も自分に何が起きたか、分かっていないようだ。

そして、チャイムが鳴り、二時間目の授業は終わった。

休憩時間に、上夫はミサを廊下に連れ出した。

「・・・ウツチー、ごめんなさい。私のせいで怒られたりして、迷惑かけて・・・」

「・・・いや、俺のほうこそありがとう・・・ミサがアイツをカエルに変えなければ、俺はアイツを殴っていた・・・そうならば退学だった」

「じゃあ、まだ学校にいていいの？」

「ああ」

上夫は教室に戻り、クラスメートにミサが魔法使いだと説明した。

「ホントかよ!？」

「ウソだろう」

「でも、木下がカエルになったのを僕は見たぞ」

「私も・・・」

「信じる、信じないは、勝手だが、このことは誰にも言わないでほしい。世間に知れたら大騒ぎになる」

「僕は信じるし誰にも言わないよ。だって僕が居眠りで殴られた時、上夫君は退学覚悟で僕をかばってくれた。」

「確かに上夫は弱いものを守ってくれるヒーローだ。俺も誰にも言わないぞ」

「私も」

「僕も」

「ウツチー、そして皆ありがとう」

「そのかわり、ミサちゃん私の友だちになってね」

「俺も頼む」

「僕も」

「良かったなあミサ、いい友だちが出来て」

「うん、ホントありがとう」

その時、

「いた、いた、ミサも一緒か・・・」

と、言いながら、セイヤが教室に入ってきた。

「犬が喋ったぞ！」

再び教室が騒がしくなった。

上夫は、クラスメートにセイヤの事を説明した。

「信じる、信じないは、勝手・・・いや、信じなくていいよ・・・」

その後、喋る化け犬がいると世間で大騒ぎになった。

第11章 ミサ学校に行く（後書き）

僕の通っていた専門高校では、暴力教師ばかり・・・
二度と戻りたくないです。

さて、そろそろ、職場の上司に僕の正体を明かす時が来たみたいで
す。

最終章 新たな生命

時は流れ・・・

上夫とミサは同棲して、愛子と力也は今年の夏に結婚した。

ある日・・・

上夫たちは母親に呼び出された。

「何！母さんが妊娠した！？」

「相手の男性は？」

「セイヤさんよ」

「おう、今日からお前達の父親だ。父さんと呼んでいいぞ！」

「ふざけるな！」

セイヤは、上夫と愛子にボコられた！

「上夫、愛子、母さんは本気でセイヤさんを愛してしまったの・・・」

「コイツは犬だぞ！」

「セイヤさんは、形は犬でも心は人間なのよ」

「しかし・・・」

「ウッチー、二人が愛し合っているなら、いいじゃない。私たちだって、魔女と人間が付き合っているんだし・・・」

「わ、分かったよ・・・」

「アニキが許すなら、私は何も言わない」

「上夫、愛子、それに、ミサちゃんと力也君、ありがとう。母さん

幸せになるから・・・」

さらに時は流れた・・・

ついに、して代とセイヤの子どもが生まれる時が来た。

「オギヤー、オギヤー・・・」

「あなた、私たちの子よ。男の子よ」

「ああ・・・もうすぐ、上夫たちも来るから・・・名前は考えてある。
男の子なら、天馬だ」

「天馬・・・いい名前」

そして、上夫とミサと愛子と力也がやって来た。

「男の子よ。あなた達の弟よ」

「名前は天馬だ！」

「俺よりいい名前付けやがって・・・」

そして、4人は赤ん坊を見て、ミサ以外の3人は、ものすごく驚いた！

「な、なんだ・・・この子は・・・」

「これが私たちの弟・・・」

3人が驚くのも無理はない。

赤ん坊は、顔は人間だが、体は犬だからだ。

「何が天馬だ！これじゃあ、人面犬じゃないか！」

「魔法の国では珍しくないよ」

「・・・この世界じゃ、珍しいんだよ」

「俺達の子、かわいいだろう」

「どこが！」

上夫と愛子が、同時に怒鳴った。

こうして、新しい家族が増え、皆、幸せに暮らしました。
めでたし、めでたし

「作者、ちよつと来い！」

この後、作者の生時は上夫と愛子にボコられました。

な、長い間・・・うつ・・・痛いよ・・・さ、最後まで・・・き、決
めては・・・よ、読んでいただき、ありがとうございました！
どんな時でも希望を持って生きてください！

最終章 新たな生命（後書き）

ご愛読ありがとうございました^^

気がつけば、この物語1年近く連載していました。

これからも頑張りますので、ヨロシクお願いします！
生時

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0398d/>

ホープ～まだ見ぬ明日にも希望を～

2010年10月9日16時34分発行